

Title	ソグド語雑録(III)
Author(s)	吉田, 豊
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 1990, 21, p. 91-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/18648
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ソグド語雑録(Ⅲ)

吉田 豊

本稿は、拙稿「ソグド語雑録(Ⅰ)」(『オリエント』31/2, 1988, pp. 165-176)の続編であり、ソグド語に関する雑多な研究を集めたものである。

1. xrβntn

この語は、パキスタン北部、インダス河上流のチラス(Chilas)付近で最近発見された岩壁銘文群のうちの一つに見出される⁽¹⁾。これらの銘文のうち中世イラン語(ソグド語・パルティア語・中世ペルシア語・バクトリア語)のものは、N. Sims-Williams によって研究され、その読みと写真版が *Corpus Inscriptionum Iranicarum* の一分冊として公刊された⁽²⁾。近い将来、テキストに対する注釈と語彙が、第二巻として公刊されるという⁽³⁾。

xrβntn を含む銘文全体のテキストと訳は次の通りである：⁽⁴⁾

nnyβntk | ZK nrsβ | ʾγt-kym | kw 10 ʾḤRZY | MN kʾrt | βγncytk |
yʾn ptʾyšt ʾt | xrβntn | twxtr | prʾysʾn | rty ZKw | ʾḤY pr | šyr
wyn|ʾn ʾM | wγšʾ

“(I) Nanai-vandak the (son) of Narisaf have come (here) on (the) ten(th day) and asked a boon from the spirit of the sacred place Kʾrt that... I may arrive (home?) more quickly and see (my) bro-

(1) この地域で発見される、種々の言語による銘文及び岩壁画については、K. Jettmar and V. Thewalt 1985 参照。

(2) N. Sims-Williams, *Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus, I* (*Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III*), London, 1989.

(3) Sims-Williams, *op. cit.*, p. 8.

(4) Sims-Williams, *op. cit.*, p. 23. テキスト中の | (短い縦線) は行の切れ目を示している。

ther in good (health) with joy”

この翻訳では訳出されていないが、動詞 *pr'ys* (過去語幹 *pr'yt*) 「到着する」の用法を考慮すれば、*xrβntn* は地名に違いない。何故ならソグド語では、動詞 *pr'ys* は到着する場所として、次の例のように通常前置詞 *kw*「～へ」⁽⁵⁾を伴う名詞をとる、e.g. *'rtȳ xwȳȳ kww šfr 'ty kww nm'nyy pr'yt* 「そして自ら恥じ、後悔することになった」(Tale A, 11. 57-58: W. B. Henning 1945, p.467). しかも、より古い時代のソグド語では、機能面でこの *kw* に対応するのは前置詞 *'t* であり⁽⁶⁾、A.D. 312-313 に書かれた *Ancient Letters* に⁽⁷⁾は、実際に *pr'ys* が *'t* をとっている例が在証される、e.g. *'ĤRZY 'YK 't srȳ pr'yt-nt*...「そして洛陽に彼らが到着したとき...」(*Ancient Letter II*, 11, 36-37: Henning 1948a, pp. 605, 607).

Xrβntn が地名であるとすれば、それは現在のターシュクルガン (中華人民共和国、新疆ウイグル自治区) の名称であると考えられる。ターシュクルガンの名前は、唐代以前の中国側の史料では次のように表記されている⁽⁸⁾：

漢盤陀 **xân b'uân d'â* (『宋雲行紀』)

渴槃陀 **k'ât b'uân d'â* (『魏書』102)

訶槃陀 **xâ b'uân d'â* (『魏書』8)

渴槃陀 **k'ât b'uân d'â* (『梁書』、『南史』)

喝槃陀 **xât b'uân d'â* (『唐書』221上)

羯槃陀 **k'jet b'uân d'â* (『唐書』43下)

竭槃陀 **k'jet b'uân d'â* (『西域記』)

渴飯檀 **k'ât bȳwen d'ân* (『慧超伝』)

これらの表記は *kh/xarb/vanda(n)* のような原語を音写したものと考えら

(5) *kw* は本来前置詞ではなかった、cf. Sims-Williams 1986.

(6) この銘文の字体は、8世紀以降のものと考えられる殆どソグド語文献の字体より、*Ancient Letters* の字体に近い、cf. Sims-Williams, *op. cit.*, p.8. 従ってより古い時代のソグド語で書かれているものと考えられる。

(7) *Ancient Letters* の時代については、F. Grenet and N. Sims-Williams 1987 参照。

(8) 白鳥庫吉『西域史研究』上、岩波書店、1941 (再版1970) pp. 132-33 を参考にした。

れ、ソグド文字による $xr\beta ntn$ [xarvandan] と完全に一致する。ソグド語の表記は一方で、白鳥（『前掲書』, p. 133）によって提案されたこの地名の原義「山道」（<yar「山」+pand「道」）に対する反証になる。 $Xr\beta ntn$ の原義については今の所不明とせざるを得ない。

桑山によれば、⁽⁹⁾ 4～5世紀中国と北西インドを結ぶルートは、インダス河上流のダレル、ギルギット、ターシュクルガン、カシュガルを經由している。従ってチラスに来ていたソグド人がターシュクルガンに向うことは当然予想されることであり、このことも $xr\beta ntn$ がターシュクルガンであることの傍証となる。このルートが専ら4～5世紀に用いられていたという事実はまた、チラスの銘文の字体が4世紀初めに書かれた Ancient Letter の字体と似ていることと符合する。⁽¹⁰⁾

2. 西域文化資料 Nos. 1144, 2921

『龍谷大学図書館蔵大谷探検隊蒐集 中央アジア 出土仏典資料』, 龍谷大学図書館, 1988, pp. 20-24 には筆者が選んだ同コレクション中の中世イラン語文書の写真が掲載されている。それらのうち nos. 17, 21, 22 は既に吉田 1985に

(9) 桑山正進 1985, pp. 129-130 参照。

(10) 岩壁の銘文を扱ったこの機会に、クチャ地区の洞窟の壁面のソグド語銘文を紹介しておきたい。Chao Huashan et al. 1987, pls. XC, XCI, XCIV には数個のソグド文字の落書きが見られる(編集者の一人 G. Pinault(*op. cit.*, pp. 178, 182)は、これらをウィグル文字であると考えている)。

(a) Plate XC(2)(=G-Qm 9)の上方トルコ・ルーン文字の左に垂直方向に書かれた2行:

$'sy\delta \mid p(\dots)\beta(\dots)r$

内容は不明である。人名を表記したものか。

(b) Plate XCI (2)(=G-Qm 11, G-Qm 12)の上方に垂直方向に書かれた2行:

$tj'ktswm \mid (m)\delta y \text{ } ^{\circ}yym$ [私] $tj'ktswm$ (=Tathāgata-soma-) がここにやって来た]

$^{\circ}yym$ の -y- は、-m- を書いてから書き直したように見える。なお、この銘文より少しく左方にソグド文字らしいものが2・3行存在するが、練習用に書きなぐられたものらしく、判読できない。

(c) Plate XCIV (=Dd 4)。トカラ語の銘文に交叉するように1行:

$\delta p'yr C'nt(r)$ [書記者 C'ntr...]

クチャ地区からは別にソグド語文書の断片も発見されている。Pelliot sogdien 27 I (cf. E. Benveniste 1940, p. 160) の原註 'DA. porte d'entrée' の DA はドゥルドルル=アクルを示すものである。また Pelliot chinois D. A. (すなわちドゥルドルル=アクル出土の漢文文書) の No. 220 はソグド語の極小断片である。後者のマイクロフィルムは、東洋文庫チベット室に於いて閲覧した。

於いて発表された。また no. 19 の研究は、Yoshida 1990 に於いて発表される予定である。ここでは残りの nos. 17, 25, 20 (各々西域文化資料 nos. 2921, 6341, 流沙残闕 no. 5) を扱う。

西域文化資料 no. 2921 は 9.5×18.5 cm の断片で裏面は空白である。文書の右端のみが残っている。卷子本の一部と思われるが、上端が行に平行して、直線的に残っている上に、糊の跡も見えないので、折本であった可能性もある。西域文化資料 no. 1144 はこの同じ文書に属する極小断片である。筆者の知る限り、この特徴のある草書体のソグド文字で書かれた写本に属する断片は、大谷コレクション中には外には存在しない。

テ ク ス ト ⁽¹¹⁾

no. 1144

1. δst]' cnn δyk'r [δst'
2.](.y δst' [

no. 2921

1. δst' [cn](n) 'ny-'k xrytk δst' []
2. δst' cnn pysk δst' cnn kwrmy(.)[]
3. (c)nn k's'kk (δ)s(t') cnn y'nm'x δst' []
4. 'ny-'k m'th 'yncw δst' cnn []
5. cnn βγm'nch δst'(')[c](nn) []

cnn...δst'「...の為に」が頻出する文書である。この構文は仏典 Pelliot sog-dien 8 の廻向文にも頻出し、Henning がその正しい意味を明かにした⁽¹²⁾。この断片も同様に先行する今は失われた仏典に添えられた廻向文であったのである

(11) no. 1144の転写は、1985年3月に行った調査の際のノートに基づいている。なお、写真版に添えられた解説で与えられた読みを少し改善した。このうち no. 2921の1行目と4行目の'nny-'k は N. Sims-Williams 博士の読みである。筆者の誤りを指摘下さった博士に感謝する。

(12) Henning 1946, pp. 736-737.

5.

ここで現われる人名は, $\delta yk'r[]$, $'ny-'k xrytk$ 「祖父 $xrytk$ 」, $pysk$, $kwrmy(.)[]$, $k's'kk$, $y'nm'x$, $'ny-'k m'th 'yncw$ 「祖母 $'yncw$ 」, $\beta_7m'nch$ の9個である。 $\beta_7m'nch$ は語尾 $-h$ を取っているので、女性の名前と考えらる。従って最後の2人が女性である。一族のうちの男性への廻向文を女性のそれに先行させたものと考えられる。

これらの人名のうち $'yncw$ は明らかにトルコ系の人名であるが (cf. 羽田 1957, p. 332, Henning 1938, p. 554), それ以外はソグド語のものと考えられ、ソグド語及び古代イラン語の人名研究の資料を提供する。例えば $k's'kk$ は、ペルセポリス出土のエラム語の粘土版に在証される $ka-sa-ak-ka$ と同源であろう。⁽¹³⁾ また $y'nm'x$ ($<y'n$ 「恩恵」 + $m'x$ 「月 (神)」?) は、トゥルフアンのアスターナ出土の漢文文獻に現われるソグド人名曹演莫 $*j\ddot{a}n m\ddot{a}k$ と同じものであるに違いない。⁽¹⁴⁾

3. 西域文化資料 No. 6341⁽¹⁵⁾

西域文化資料 No. 6341 は 8.5×26.0 cm の断片で、左右の両端と下端を残している。この文書は実際に使われた手紙の末尾の部分で、今も折り跡が残っている。折り畳んで外側になる部分の2箇所にて2行ずつ宛先が書かれている。その一方は折り畳んでできた短冊形の長い辺に平行して、他方は逆に短い辺にそって書かれている。字体は草書体の中でも古風なものに属し、 s と \dot{s} は容易に区別できる。

(13) M. Mayrhofer 1973, p. 179 参照。

(14) 「吐魯番出土文書」第三冊, 文物出版社, 北京, 1981, p.119 参照。なお、これら以外の名前では、 $xrytk$ は動詞 $xryn$ 「買う」の過去分詞形であり、その原義は「買われた」である。 $pysk$ については吉田他1988, p.27 参照。さらに「吐魯番出土文書」第六冊, p.477 の曹畢娑もこの名前の音写形と考えられる。 $\beta_7m'nch$ は β_7- 「神」 + $m'n$ 「心」 + $-c$ (人名形成の接尾辞) と分析されるかもしれない。 $\delta yk'r[]$, $kwrmy(.)[]$ の語源は不明である。

(15) この断片については吉田 1985, p.58 に於いて言及し、そのテキストの一部を引用しておいた。ここではその読みと解釈の一部を改善した。

Recto

1. [](s)[]
2. 'cw 'ny' ptškw'nh 'skw(')[t](.)'n^a x(w)ty ptšk(w) [y'm]
3. 'kw β_γw k'n'k trx'n 'sk'tc s'r βntk β_γy^b-βntk pr β_γy pōkh γr[β]
4. nm'cyw ptškw'y'm

Verso a

1. β_γw 'sk'tc k'n'k trx'n s'r
2. đšcy'pt dykh

Verso b

1. 'kw
2. cnn

^a 或いは](.).nn; ^b 或いは β_γw. 先行する γ の尾と y が交叉して w に似た外見になったものと考えた。

訳

Recto

「...もし他に申し上げることがあれば...自ら申し[上げます]。神(の如き) Kanak Tarxan Askāt(a)č^{しもべ} に、僕である Vaγi-Vandak が神 (に対する場合)のように多くの敬礼を(以って)申し上げます。」

Verso a

「神(の如き) Askāt(a)č Tarxan Kanak へ...の手紙」

Verso b

「~へ」、 「~から」

訳注

k'n'k trx'n 'sk'tc: 裏面には 'sk'tc k'n'k trx'n とある。trx'n は古代トルコ語の称号 tarqan ⁽¹⁶⁾ であるが、k'n'k も 'sk'tc もソグド語の人名である。

(16) G. Clauson 1972, pp. 539-40 参照。

'sk'tc という人名は他に Pelliot sogdien 8, 178にも現われ, *prothetic* の母音を欠く変異形 *sk'tc* はムグ文書 Nov. 3 及び Nov. 4 に在証される。⁽¹⁷⁾ *k'n'k* は、敦煌にあった帰化ソグド人集落従下郷の 8 世紀中頃の戸籍に現われる人名、康迦那と同じものであろう。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾ 今のところ筆者には、*k'n'k trx'n* と '*sk'tc* という 2 人の人間が問題になっているのか、全体が 1 人の人間の名前と称号なのか決定できない。

βγy-βntk: 原義「神の僕」同じ構成の名前 *βγβntky* は、上述したインダス河上流の銘文群の中にも見出される。⁽²⁰⁾ さらにアスターナ出土文書中の康婆何畔陀 (**b'uâ γâ b'uân d'â*) も同じ構成の名前であらう。⁽²¹⁾

pr βγy pōkh 「神に(対する)ように」: *pōkh* の意味「あり様、様式」については、Benveniste 1946, p. 116 及び Henning 1946, p. 722 参照。これと類似の '*c nztw nm'cyw βr'n 'YKZY wyšnw βγ'nw* 「私は近くから神々に対するように、(あなたに)敬礼を捧げます」という表現は、AL V, 4 の書き出しの定型句の一部として現われる。⁽²²⁾ またムグ文書の手紙文の多くには、手紙の書き出しの定型句の一部が手紙の末尾に於いて繰り返されており、⁽²³⁾ 本手紙文書もその形態をとっているものと考えられる。

δšcy'pt δykh 「*δšcy'pt*(の)手紙」: *δšcy'pt* という語形は初出である。これは、Mahnāmāg の高昌(*cyn'ncknδ*) の信者のリストに現われる *δš'pt* (1.68) 及びクチャ (*'kwcyk*) の信者の中の *δc'pt* (ll. 81-82) と同一の語に違いない。⁽²⁴⁾ さらに、羽田亨が校訂したマニ教ウィグル語の祈願文中の人名のリストに *δš(p)[]* と読める箇所があり、この部分でも *δš'(p)[t]* と補うことができるだ

(17) D. Weber 1972, p. 194, n. 15 参照。

(18) 池田 温, 「8 世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」, 『ユーラシア文化研究』1, 1965, pp. 49-92 (特に p. 64) 参照。

(19) AL II の *k'n'kk* も参照せよ。

(20) H. Humbach 1980, p. 224, Nr. 137.

(21) 上掲『吐魯番出土文書』, 第三冊, p. 319.

(22) 類似の別の表現については Sims-Williams 1981, p. 235 参照。

(23) 例えば B-10, B-15, B-16 など。

(24) F.W.K. Müller 1912, pp. 10-11. *-šcy->-š-*及び *-šcy->-c-* の変化のうち、後者については実例がある, cf. GMS § 382 及び N. Sims-Williams and H. Halén 1980, p. 7. 前者についても同様に、調音点を同じくする子音の子音束の単純化と考えられる。

(25) ろう。これらの文脈から考えて *δšcy'pt, etc.* は人名或いは称号と考えられる。しかし、語源等は不明である。

手紙文書を扱ったこの機会に P. Zieme が発表したマニ教ウィグル語の手紙の練習に書かれた、ソグド語の単語の存在を指摘しておきたい。P. Zieme 1975, Text 32 (=TII 122=Ch/U 6854, 函版 XLVI) のウィグル語の第1行と第2行の間にはソグド語で 't βγ'nw 'nγwnw 「神々に似た [əvtadan]へ」と書かれている。⁽²⁶⁾ また第6行の後に書かれた Zieme が *tipdawanu, qipdawanu* と読む語はどちらも *xypō'wntw* 「御主人(様)」と読まれるべきである。なお、この語に先行する文字のややかすれた部分は、大胆な推測が許されるなら、*γw'n(w)['](c)y pt(š)-[kwy'm]* 「罪の許しを(お願い)申し上げます」と読むことができるかもしれない。⁽²⁷⁾

この文書はその字体から判断し同一人物によって書かれたものなので、ソグド語でもウィグル語でも文章を書くことができる人間がいた証拠の一つとなるであろう。

4. 流 沙 残 闕

8.0×9.0 cm の断片で、両端を欠いている。漢文仏典『妙法蓮華経』の紙背を利用して書かれている。ソグド文字で書かれてはいるが、言語はソグド語ではなく、ソグド文字で音写された漢語の仏典である。

転 写

- | | | |
|------|--------------------------|---|
| 1. [|](.) t [|] |
| 2. [|](..) z-yp kymxw c[y]x [|] |
| 3. [|] ly kynx'y xwnk [|] |
| 4. [|] sy pyxβw t'y šyn [|] |

(25) 羽田亨1958, p. 329, l. 7. 羽田はδš'...と読んでいるが、'の後にpの円の一部が見える。

(26) ソグド語の手紙の初頭には、この表現が用いられた例がある、cf. Sims-Williams and Halén, art. cit., p. 7. なお Zieme は *ät vaγanu anatu* と読んでいる。

(27) この表現は、マニ教ウィグル語の手書文書に用いられる定型句の一つ *suy-da yazuqda bošunu ötünü täginürbiz* (Zieme, *op. cit.*, p. 65, 702-703)に対応する。

5. [(.) kymxw cyγ βwn (.)] []

6. [] kynx'y xwnk m' []

7. [] tsy ty t(.) []

z-yp(=入*ńzjəp), kymxw (=金剛 *kijəm káng), xwnk (空 *k'ung) は明らかであるが、この仏典の原典を比定できないので、他の転写形を漢字に還元することができない。この断片の存在から、ソグド人が漢文仏典を翻訳するだけでなく、音読もしていたことが知られる。実際、未発表ながら漢文仏典をソグド文字で音写した資料は他にも存在する。筆者が把握しているのは次の3点⁽²⁸⁾である。

(i) So 14, 830 (=T II T 1?) 正書体のソグド文字による音写(7行)のそばに対応する漢字を添えた資料。書き込まれた漢字から、ソグド文字が縦書きされていたことがわかる。W. Sundermann 氏と百済氏による共同研究が予定されていると聞く。筆者は、百済氏より提供されたこの文書の写真のゼロックス・コピーにより調査した。O. Hansen 1968, p. 84, n. 2 が言及するのはこの資料に違いない。

(ii) Mainz 160+Mainz 624. 左端を欠く poṭhi の断片で表裏各々9行を残している。書体は正書体である。禅宗の文献である『金剛五礼』の音写であるが、⁽²⁹⁾これは裏面の最後の7行で終わっており、残りは別の仏典の音写である。従って、この poṭhi は一連の漢文仏典を連写したものの一葉であったことになる。『金剛五礼』を含む漢文写本が多くの場合連写本であることも、このことを証明するだろう。この文献は西ベルリンの Staatsbibliothek に於いて原物を調査した。現在その研究を準備中である。

(iii) TID III y 107. これも poṭhi の断片である。上記の poṭhi 同様表裏各々9行を残している。内容の比定はできていない。筆者はハンブルグ大学

(28) なお、Hamilton 1981 はソグド文字で音写された漢語の数詞を発表した。

(29) 『金剛五礼』については川崎ミチコ 1980, pp. 310-312 参照。敦煌出土の『金剛五礼』を含む写本には、筆者の知る限り次の11点がある：S 1674, 4173, 4712, P 2975, 3559, 3645, 3792, 北京図書館所蔵島29, 衣37, 乃74, レニングラード本 Φ 176。従って川崎ミチコ1980の記事は改める必要がある。

のイラン学科所蔵の写真によって調査した。

最近ウイグル文字で音写した『薬師経』の存在が報告された。⁽³⁰⁾ ソグド文字はウイグル語の表記にも用いられることがあるので、これらの音写仏典が、実はウイグル人によって使用されたのではないか、という疑いは残る。特に(ii)の資料に於ける漢語の見母の取り扱いは、基本的にウイグル語に導入されたものと同じであることは注目すべきである。⁽³¹⁾

Appendix

マニ教ウイグル語の断片を校訂した Zieme 1975⁽³²⁾ 通読するうち、二・三の点に気が付いたので、報告しておきたい。

A. Text 11 Ch/U 6818 v

Text 11 は、バルティア語の讃歌 *wāḡan hasēnag* 『初聲讚夷數文』のウイグル語訳である。この点は、この同じ讃歌を含む2種類のウイグル語文書を、敦煌出土の文献中に発見し校訂した J. Hamilton が明らかにした。⁽³³⁾

全体が22の *verse* から成るこの讃歌のうち、例えば第7 *verse* はバルティア語及びそのソグド語訳、ウイグル語訳では次のようである：⁽³⁴⁾

frhyfṭ [hsyng] (M259 c Verso) 「最初の愛」
愛 最初の

fry'w(y) pyrnmyk (TM 351 Verso) 「同上」
愛 最初の

amranmaq ašnuqī. ṭin tura tānri (Pelliot chinois 3049, 1. 32)⁽³⁵⁾
愛 最初の 風 風(?) 神

(30) Zieme 1988, p. 222, n. 9 参照。

(31) 例えば金 *kiəm, 剛 *kāng は各々ソグド文字で *kym*, *kw* ウイグル文字で *kym*, *qw* と転写されている。(ウイグル文字の資料については庄垣内 1986, pp. 37-39 参照)。ソグド文字の転写に於ける *k* と *x* の区別は、ウイグルに於けると同様 *i* 介母の有無に依存しているものと思われる。

(32) なお Zieme 1975, pp. 48-49 に引用された T II S21a(=U 261)は、『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』、『大正』(No. 1064), 20巻, p. 116a に当る。

(33) Hamilton 1986, p. 46.

(34) バルティア語版及びそのソグド語訳は E. Morano 1982, p. 23 に依る。ただし *fry'w(y)* の読みは Hamilton, *op. cit.*, p. 47 に従う。

(35) Hamilton, *op. cit.*, p. 39. 同じ *verse* は *op. cit.*, p. 49 及び Zieme, *op. cit.*, p. 33 に収録されている。

Hamilton *op. cit.*, p. 43 は上の文を 'L'amour, c'est le dieu de l'Air primordial' と翻訳している。また注釈 (*op. cit.*, p. 47) に於いて、トルコ語では形容詞は名詞に先行するので、aşnuqi 「初めての」は後続の語を修飾しているとしている。この点では Zieme や K. Röhrborn 1988, p. 245 も同様で、この讃歌に頻出する aşnuqi をすべて後続の語の修飾語として翻訳している。

しかしソグド語訳に於いても普通の語順に反して、pyrnmyc 「最初の」が先行の語を修飾しているように、aşnuqi も先行する語を修飾しているに違いない。ソグド語もウイグル語もこの点では、原典であるパルティア語の語順に忠実に従ったことになる。写本で aşnuqi の後にしばしば置かれている句読点は、明らかにそこに意味の切れ目があったことを示している。

B. Text 18 TIDx 17 (U 219 a, b)

Text 18 は光の国の Father of Greatness に捧げられた讃歌である。筆者はこの同じ讃歌を含む断片の写真が、『西域考古図譜』下巻、大正四年、国華社、西域文書(6)に掲載されていることに気が付いた。この文書は漢文仏典(『佛説灌頂七萬二千神王護比丘呪經』、『大正』21巻、pp. 535-536)の紙背に書かれている。断片は両端を残しており、残された16行のうち最初の1行以外はほぼ完全に読みとれる。Zieme の Text 18 の最初の4行が本断片の最後の4行に対応する、つまり本文書は Text 18 に先行する部分に対応する。

テ ク ス ト ⁽³⁶⁾

1. [] (. m . . .) ' (w) y z - ' k y k ^a
2. k w r w r - s y z . y m ' y w k n w r m n t n k r y m
3. s y z - ' n k p y š t w y m ' n p y r ' " d y n c y γ
4. y ' r w x k w r t l ' t y d ' m ' n k z k ' r w t n k r y m
5. s y z x w t l w γ ' y l - ' y k p ' š ' n k z - d ' k d w r

(36) この文書に用いられたウイグル文字は非常に特殊で、Sh. Geng et al. 1989, pp. 343-45 に指摘されたような、古風な特徴を示している。また、森安孝夫 1989, pp. 455-57 が古い写本の特徴であることを明らかにした。語末の -x と -γ の区別もある。それらのことが明らかになるように、ここでは敢えて文字転写のみを提示することにした。解釈については、翻訳から諒解されたい。

6. syz. kwyrtl' tw_γy "δyncy_γ y'rwx
7. kwrkwnkwz. yyr 'wyz-' n'nk "nt'_γ
8. ywx. ym' ywknwr mn tnkrym syz-'nk
9. 'ky ykrmy twy-m'n y'rwx tnkry^b
10. xyrξynynk'rw. syz-'nk "δyncy_γ y'rwx
11. 'wrδwnkwz-ny. 'wlw_γ pwkwn x'lyty
12. 'yl'ytyr-l'r. ym' ywkwnwr mn tnkr[ym]
13. syz-'nk "ltmyš twm'n twrlwk
14. 'wy-'wncynk'z γ'rw. syz-'nk 'wl-'w(γ)
15. y'rwx 'yl-'nkz-δ' 'wkwš twrlwk
16. 'wkryncwlwk 'wy-'wn 'wynwr-(l)['r]^c

^a或いは n(w)yz-'kyk; ^b行をうめるために r を長く引き伸ばしている; ^csic.
Text 18では 'wyn'ywr-l'r (oynayur-lar)

訳

「…上にあるものを⁽³⁷⁾、あなた様は、見られます。⁽³⁸⁾ また神よ、私はあなた様の 5 万里⁽³⁹⁾の(大きさの)特別にすばらしい、輝く、美しい王冠に敬礼します。(それを)神よ、栄光ある王であるあなた様は、その頭にかぶられます。美しいその徽章、特別にすばらしい、輝くあなた様の姿に匹敵するものは地上には全くありません。また神よ、私はあなた様の12万の、輝く、神なる処女神に敬礼致します。その者たちは、あなた様の特別にすばらしい、輝く宮殿を、その大きな柱で持ち上げて運びます。また神よ、私はあなた様の60万種の楽人に敬礼します。その者たちは、あなた様の偉大な、光の国で、多種多様な楽しい音楽を演奏します…」

C. Text 32 T II 122 (Ch/U 6854)

(37) この解釈は庄垣内正弘氏によるもの。或いは özakik「中心を」か?

(38) 原文 siz. 敬意を示す為の2人称複数形であるので、このように翻訳した。以下同様。

(39) 原文 pyr'(birä). 光の国を描写したソグド語文書 M 178 では、対応する語として (βrywr) fswx '(ten thousand) parasang' が用いられている, cf. Henning 1948, p. 313.

この断片に含まれるいくつかのソグド語の単語については、既に上で触れた。この断片にはもう一箇所2行にわたってソグド語が書かれている。この点については Zieme が明らかにし、W. Sundermann がその部分を翻訳した。テキストと Sundermann による訳は次の通りである：⁽⁴⁰⁾

tnkry mnxwmyδrwsn

ywk prwyr'tm'nty prnxwnty

'Des Gottes 'Licht-Nous' glückliche Lehr-Transformation'

ここでは、ソグド語の表現 ywk prwyr'tm'nty について考察してみたい。

Sundermann が Lehr と訳した ywk 「教え、教訓」については問題がない。prwyr'tm'nty は動詞 prwyr't の動名詞形である。この動詞の原義は「回転させる」で、他に「形を変える(transform)、翻訳する」の意味もある。Sundermann は目的語が ywk であることを考慮して、Transformation という訳語を選んだものと考えられる。

一方 Zieme はこの行に対する注釈で、ywk というソグド語形が、マニ教ウィグル語文献にも用いられていることを指摘した。この文書は、敦煌出土の漢訳マニ教文献（北京図書館所蔵 宇56）、所謂 *Traité* に対応するウィグル語版である。当該部分のウィグル語版、漢訳は各々次の通りである：⁽⁴¹⁾

törtünë alqış qdin qyür unitmaz başik aymaqıña bitig oqımaqıña
yuk tävirmäkiñä-[..] .. biş[inç ...]

'Viertens: Er denkt an die (richtige) Zeit der Hymnen und verpasst (sic) nicht. Durch das Rezitieren der Hymnen, durch das Lesen der

(40) Zieme のテキストを少しく改めた。

(41) マニ教ウィグル語文献には、多くの中世イラン語の単語が借用されている、cf. A. van Tongerloo 1988. 中には原語を確定することが困難なこともある。Geng, et al. 1987, p. 53, n. 20 が äšbir と読み、文脈から 'Kampfplatz, Arena' を意味するイラン語の借用語と考えたものは、'spyr と読み、パルティア語 'spyr からの借用語とみなすべきである。パルティア語 'spyr については Sundermann 1981, p. 30 参照。また Hamilton 1986, p. 58, l. 15 の 'wš'y は単に rwsn 「光」と読まれるべきであろう。n の後にある奇妙な字形は、次の語の最初の文字を書き誤ったものであろう。

(42) *Traité* のパルティア語原典及び諸言語の訳については、Sundermann 1983 参照。またウィグル語訳については、最近発表された改訂版 H.-J. Klimkeit and H. Schmidt-Glinterz 1984 が便利である。

Bücher, durch das Bedenken der Lehre...⁽⁴³⁾

四者讚明禮誦轉誦抄寫繼念思惟如是等時無有虛度

‘Viertens: Die Hymnen rezitieren sie entsprechend den Riten, und das Rezierte schreiben sie nieder und wiederholen es in Gedanken; auf diese Weise gibt es zu keiner Zeit einen Augenblick, der leer wäre.’⁽⁴⁴⁾

ところでウィグル語の *tävir-* は「回す」を意味し、*Zieme* の *Bedenken* は漢訳及び文脈を考慮した意識である。従ってソグド語の *ywk prwyr’tm’nty* とウィグルの *yuk tävirmäk* は、完全に並行する表現で、その原義は「uk を回転させること」である。

マニ教ウィグル語の文献の多くは、イラン語からの翻訳であり、この場合も *yuk tävir-* は、ベースとなったバルティア語乃至はそのソグド語訳の表現を直訳したものであろう。この表現は、*ywk* を勉強することに係わるものであることに違いないが、その具体的な意味を特定できない。また漢訳とウィグル語訳は一対一に対応しないので、漢訳もこの場合助けにならない。⁽⁴⁷⁾

因みに *Pelliot sogdien 12* は短い *ywk* を集めたものである。その内容は非常に一般的で、特定の宗教を前提としない。従って *Hansen 1968, p. 88* が、これを仏典とみなすのは適切ではない。むしろゾロアスター教の *Handarz* 文

(43) *Klimkeit and Schmidt-Glinterz, art. cit, p. 95* の訳、*Zieme* のものを少しく改善しているが、ここで問題にする *yuk tävirmäkinä* については、どちらも *durch das Bedenken der Lehre* と訳している。

(44) *H. Schmidt-Glinterz 1987, p. 97* の訳。

(45) cf. *Clauson 1972, p. 443*.

(46) この部分に対応するバルティア語版 *M 5845, M 4450* (cf. *Sundermann 1983, pp. 234-35*) は、残念ながら発表されていない。

(47) 勿論「轉誦」の「轉」がこれに対応するものではないかという疑いは残る。また *prwyr’t* の特別な意味「くり返す(?)」については、*Sundermann 1981, p. 48, 559* も参照せよ。

(48) 例えば34番目の教訓の一節は次のようである：

...p'rZY rync'kk 'z-'wn ywk ywc'y prtr c'n'kw γrβ γr'm'k pr'yc'y pw ywk pyō'r rtkō šyr'kk ywk 'PZY 'βs'k ywγty β'y rtšy ZK ywk L' pn'y-št βwt rty ZKn m'th ZY ZKn 'BYw ZY ZKn kwtr γnt'k-n'm'y L' kwnty...「…というのは、小さい子供に教訓を教えることは、教訓を与えずに多くの財産を残すことより良いからだ。もし良い教えと訓練が授けられているなら、その者の教訓は失われ得ない。そして両親と一族に悪い評判を立てない…」(P 12, 11. 35-39).

献と比較されるべきかもしれない。もしこの推定が正しいとすれば、ゾロアスター教のモチーフを利用することがあったマニ教徒が、この文献を書いていた可能性も出てくる。

略号と参考文献

AL=Ancient Letters, in Reichelt 1931

GMS=Gershevitch 1954

P=パリ国民図書館所蔵 Pelliot 将来敦煌出土漢文文書

Polliot sogdien, in Benveniste 1940

S=大英図書館所蔵 Stein 将来敦煌出土漢文文書

Nov. 3, Nov. 4, B-10, B-15 and B-16, in Livšic 1962

Benveniste, E., 1940: *Textes sogdiens*, Paris.

—————, 1946: *Vessantara Jātaka*, Paris.

Chao, H., Gaulier, S., Maillard, M. and G. Pinault, 1987: *Sites divers de la région de Koutcha. Épigraphie koutchéenne*, Paris.

Clauson, G., 1972: *An etymological dictionary of pre-thirteenth-century Turkish*, Oxford.

Geng, Sh., Klimkeit, H. -J. and J. P. Laut, 1987: 'Manis Wettkampf mit dem Prinzen. Ein neues manichäischtürkisches Fragment aus Turfan', *ZDMG* 137, pp. 44-58.

—————, 1989: 'Die Geschichte der drei Prinzen. Weitere neue manichäischtürkische Fragmente aus Turfan', *ZDMG* 139, pp. 328-45.

Gershevitch, I., 1954: *A grammar of Manichean Sogdian*, Oxford.

Grenet, F. and N. Sims-Williams, 1987: 'The historical context of the Sogdian Ancient Letters', *Transition periods in Iranian history* (Studia Iranica, cahier 5), Leuven, pp. 101-22.

Hamilton, J., 1981: 'Les nombres chinois de un à trente en transcription sogdienne', *Nouvelles contribution aux études des Touen-houang*, Genève, pp. 295-301.

—————, 1986: *Manuscrits ouïgours du IX^e-X^e siècle de Touen-houang*, tome I, Paris.

Hansen, O., 1968: 'Die buddhistische und christliche Literatur', B. Spuler(ed.), *Handbuch der Orientalistik*, Erste Abteilung, IV/2, Leiden, pp. 77-99.

Henning, W. B., 1938: 'Argi and the "Tocharians"', *BSOS* 9, pp. 545-71.

—————, 1945: 'Sogdian tales', *BSOAS* 11, pp. 465-87.

(49) cf. Henning 1945, p.476; Zieme 1988, p. 228. 特に後者は、Handarz 文献とマニ教ウィグル語文書とを比較している。

- , 1946: 'The Sogdian texts of Paris', *BSOAS* 11, pp. 713-40.
- , 1948: 'A Sogdian fragment of the Manichæan cosmogony', *BSOAS* 12, pp. 306-18.
- , 1948a: 'The date of the Sogdian Ancient Letters', *BSOAS* 12, pp. 601-15.
- Humbach, H., 1980: 'Die sogdischen Inschriftenfunde vom oberen Indus (Pakistan)', *Allgemeine und vergleichende Archäologie, Beiträge des Deutschen archäologischen Instituts*, 2, pp. 201-28.
- Jettmar, K. and V. Thewalt, 1985: *Zwischen Gandhāra und den Seidenstraßen. Felsbilder am Karakorum Highway*, Mainz.
- Karlgren, B., 1957: *Grammata Serica Recensa*, Stockholm.
- Klimkeit, H.-J. and H. Schmidt-Glintzer, 1984: 'Die türkischen Parallelen zum chinesisch-manichäischen Traktat', *Zentralasiatische Studien* 17, pp. 82-117.
- Livšic, V. A., 1962: *Juridičeskie dokumenty i pis'ma (Sogdijskie dokumenty s gory Mug II)*, Moscow.
- Mayrhofer, M., 1973: *Onomastica Persepolitana. Das altiranische Namengut der Persepolis-Täfelchen*, Wien.
- Morano, E., 1982: 'The Sogdian hymns of *Stellung Jesu*', *East and West*, N. S. 32, pp. 9-43.
- Müller, F. W. K., 1912: *Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Maḥrnāmāg)*, APAW.
- Reichelt, H., 1931: *Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums*, II, Heidelberg.
- Röhrborn, K., 1988: *Uigurisches Wörterbuch. Sprachmaterial der vorislamischen türkischen Texte aus Zentralasien*, Lieferung 4, Wiesbaden.
- Schmidt-Glintzer, H., 1987: *Chinesische Manichaica. Mit textkritischen Anmerkungen und einem Glossar*, Wiesbaden.
- Sims-Williams, N., 1981: 'The Sogdian fragments of Leningrad', *BSOAS* 44, pp. 231-40.
- , 1986: 'Sogdian *kw* and Slavonic *ku*', I. M. D'jakonov(ed.), *Peredne aziatskij Sbornik* IV, Moscow, pp. 116-21.
- , 1989: *Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus*, I (Corpus Inscriptionum Iranicarum Part II, Vol. III), London.
- Sims-Williams, N and H. Halén, 1980: *The Middle Iranian fragments in Sogdian script from the Mannerheim collection* (Studia Orientalia 51: 13), Helsinki.
- Sundermann, W., 1981: *Mitteliranische manichäische Texte kirchengeschichtlichen Inhalts* (Berliner Turfantexte XI), Berlin.
- , 1983: 'Der chinesische Traité Manichéen und der parthische Sermon vom

- Lichtnous', *AoF* 10, pp. 231-42.
- Tongerloo, A. van, 1988: 'Notes on the Iranian elements in the Old Uygur Manichean texts', P. Bryder (ed.), *Manichaeae studies. Proceedings of the first international conference on Manichaeism*, Lund, pp. 213-19.
- Weber, D., 1972: 'Zur sogdischen Personennamengebung', *IF* 77, pp. 191-208.
- Yoshida, Y., 1990: 'On a Manichean Middle Iranian fragment lost from the Ōtani collection', *Festschrift for Professor T. Nishida on his 60th birthday*, Kyoto (forthcoming).
- Zieme, P., 1975: *Manichäisch-türkische Texte* (Berliner Turfantexte V), Berlin.
- , 1988: 'Ein geistiges Drogenbuch der türkischen Manichäer, P. Bryder (ed.), *Manichaeae Studies*, Lund, pp. 221-28.
- 川崎ミチコ, 1980: 「礼讚文・塔文」, 篠原壽雄・田中良昭編『講座敦煌 8 敦煌仏典と禪』, 東京, 大東出版社, pp. 307-16.
- 桑山正進, 1985: 「パーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道」, 『東方學報』 57, pp. 109-209.
- 庄垣内正弘, 1986: 「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」, 『内陸アジア言語の研究』 II (神戸市外国語大学 外国学研究 XVII), pp. 17-156.
- 羽田 亨, 1958: 「吐魯番出土 回鶻文摩尼教徒祈願文の斷簡」, 『羽田博士史学論文集下巻』, 京都, pp. 325-47.
- 森安孝夫, 1989: 「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」, 『史學雜誌』 第98編, pp. 453-87.
- 吉田 豊・森安孝夫・新疆ウイグル自治区博物館, 1988: 「魏氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」, 『内陸アジア言語の研究』 IV (神戸市外国語大学外国学研究 XIX), pp. 1-50.
- 吉田 豊, 1985: 「大谷探検隊将来中世イラン語文書管見」, 『オリエント』 28, pp. 50-65.